

国立国語研究所学術情報リポジトリ

The shift to plain-style in the Japanese conversations by the same generation strangers : Focusing on the situations where it tends to occur and its occurring ratio

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 陳, 文敏, CHEN, Wen-Miin メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002111

同年代の初対面同士による会話に見られる 「ダ体発話」へのシフト —生起しやすい状況とその頻度をめぐって—

陳 文敏

(名古屋大学大学院生)

キーワード

「ダ体発話」へのシフト, 情報の受信, 情報の整理, 感情の表出, 無意識

要 旨

日本語の会話では同一話者の発話が「デス・マス体」から「ダ体」へ、またはその逆へと切り替わることがよく見られる。このスピーチレベル・シフトについてはこれまでに多くの研究があり、シフトは「心的距離の調節」と「談話の展開標識」の役割を果たすものとされている。しかし、「ダ体発話」へシフトする状況とその頻度に関してはまだ十分には解明されていない。

そこで、本稿では同年代の初対面日本語母語話者同士の会話を資料に、「ダ体発話」へシフトする状況について分析した。その結果、「ダ体発話」へのシフトは八つの状況で現れやすいことが明らかになった。その八つの状況は(1)情報の受信を示す時、(2)情報の整理を表す時、(3)感情の表出を行う時の三つに分類できた。そして、フォローアップ・インタビューの報告から、日本語母語話者は多くの場合無意識に「ダ体発話」にシフトしていることが確認できた。日本語母語話者はその八つの状況の特性をうまく利用して「ダ体発話」へのシフトを行うことによって、相手に対する親しみを表し、話しやすい雰囲気を作り出していると考えられる。

1. はじめに

我々人間はことばを使って情報のやり取りを行うと同時に、相手との社会的関係を言語の表現形式に反映させる(井出1993)。その典型的な例として日本語では「デス・マス体」と「ダ体」の選択を挙げることができる。日本語の会話では同一話者の発話が会話の途中で「デス・マス体」から「ダ体」へ、または「ダ体」から「デス・マス体」へと切り替わることがある。これは従来から「スピーチレベル・シフト」と呼ばれてきた現象である¹⁾。

日本語母語話者は会話の際決して好き勝手にスピーチレベル・シフトを行っているわけではない。母語話者はシフトが許容できる状況を知っており、時には円滑、あるいは効果的なコミュニケーションを行うためにスピーチレベル・シフトを利用することすらあると考えられる。

本稿では「デス・マス体発話」を基本とする初対面同士の会話を資料に、「ダ体発話」へシフトしやすい状況を特定し、このような会話におけるスピーチレベル・シフトの機能の解明につなげたいと考える。

1. 1. 先行研究

スピーチレベル・シフト (Speech level shift) という用語を使ったのは、管見の限りではIkuta (1983) が最初である。それ以来、特に90年代に入ってからスピーチレベル・シフトの生起する要因と機能について盛んに研究されるようになってきている。例えば、母語場面の会話についての研究ではテレビやラジオの座談番組を扱っているIkuta (1983), 生田・井出 (1983), 三牧 (1993), 足立 (1995), 初対面同士の会話を資料にしている宇佐美 (1995), 三牧 (2000) がある。特定の複数の話者による会話を縦断的に収集して分析している大浜他 (1998), 鈴木 (1999), 教室談話をを用いている岡本 (1997), 学生の討論を資料にしている杉山 (2000) も挙げられる。それから、接触場面の会話に焦点をあてた上仲 (1997), 陳 (1998) もある。ほかに小説や新聞・雑誌の投稿などについて分析している研究もあるが、紙幅の関係で省略する。

上記の研究では「デス・マス体発話」の使用が基本となっている会話を資料にするものが多い (Ikuta1983, 生田・井出1983, 三牧1993, 足立1995, 宇佐美1995)。その理由として少なくとも次の2点が挙げられる。まず「デス・マス体発話」の使用が基本となる会話では比較的スピーチレベル・シフトが多く見られ、分析対象がより明確に把握できること、次にそうした会話に見られる「ダ体発話」へのシフトがなぜ生起するか、その機能が何かはまだ十分に解明されていないことである。

ここで先行研究の分析の結果である「ダ体発話」へのシフトを次の表1にまとめる。ただし、先行研究では「ダ体発話」へのシフトだけではなく、「ダ体」にシフトした発話が「デス・マス体発話」へ戻るといったシフトについても分析しているが、ここでは本稿と直接関わる「ダ体発話」へのシフトのみを取り上げる。

表1 先行研究で挙げられている「ダ体発話」へのシフトの機能・条件

		Ikuta (1983)	生田・井出 (1983)	三牧 (1993)	足立 (1995)	宇佐美 (1995)
「心的距離 の調節」	(a) 相手への共感を示す	○	○	○	○	○
	(b) 親しみを表す	○	○	○	○	○
	(c) 冗談を言う時					○
	(d) 相手の「ダ体発話」に合わせる時					○
「談話の展 開標識」	(e) 小さな話題への移行	○	○	○	○	
	(f) 前の発話について説明や例示をしたりする時	○	○	○	○	
	(g) 独り言的な発話・自問するような発話をする時			○		○
	(h) 何かを確認したり、確認のための質問をする、 あるいはそれに答える時					○
	(i) 重要部分の明示、強調			○		
	(j) 中途終了型発話 ²					○

注：「○」が付いた箇所は、当該先行研究でその機能・条件に触れていることを表す。

表1の一番左側に示したように、スピーチレベル・シフトが「心的距離の調節」(「ダ体発話」へのシフトは心的距離の短縮)、及び「談話の展開標識」の役割を果たすことは、すべての研究で見られる一致した見解である。しかしながら、その下位項目(a)～(j)に関しては見解の相違が見

られる。そして、表1の表題に示したように、その下位項目を包括的に指す用語は研究者によって異なっている。生田・井出(1983)、三牧(1993)は「機能」、足立(1995)、宇佐美(1995)は「条件」という用語を使っている。この下位項目はといったスピーチレベル・シフトの生起する条件なのか、あるいはスピーチレベル・シフトの果たす機能なのかがはっきりしない。

さらに、宇佐美(1995:37)は、表1に挙げた「条件を整えば、いつでもスピーチレベルシフトが生じるか」というと、そうではない(下線は原文のまま)と述べ、相手との上下関係、性差によってスピーチレベル・シフトの頻度が異なるということについても論じている。しかし、表1にあるそれぞれの機能・条件において、スピーチレベル・シフトが実際にどれぐらいの頻度で生起するかはまだ明らかになっていない。

1. 2. 本稿の研究課題

スピーチレベル・シフトの「機能」を明らかにするには、まずシフトしやすい状況³を客観的に把握する必要があると考える。そこで、本稿では「デス・マス体発話」の使用が基本となっている会話における「ダ体発話」へのシフトに焦点をあて、以下の二つの研究課題を設定する。

課題1：「ダ体発話」へのシフトが起りやすいのはどのような状況か

課題2：そのような状況で実際にどの程度の頻度でシフトが起きているか

「ダ体発話」へのシフトに関する主な先行研究の結果は先の表1にまとめたが、分析するにあたってはそれにとらわれることなく、会話資料に観察される実例から上記の二つの研究課題の解明を進めることにする。

2. 会話資料

会話資料の収集は日本語母語話者8名(男性4名、女性4名、出身は愛知県、長野県、兵庫県、福井県、以下、母語話者)に依頼して行った。会話資料を収集した時点では、母語話者は全員25~29歳の大学院生か研究生で、相手とは初対面である。表2に示すように、二人一組で、自己紹介から始め、自由に会話をしてもらい、計8組219分の会話を収集した。会話の後、フォローアップ・インタビューによって相手の属性についての判断、互いのスピーチレベル・シフトに関する言語使用意識などについて確認した⁴。その結果は分析と考察を行う際、参考にした。

表2 会話資料の一覧

会 話 1	JM1 + JM2 (33分)	会 話 5	JM3 + JM4 (28分)
会 話 2	JF1 + JM2 (28分)	会 話 6	JF3 + JM3 (26分)
会 話 3	JF1 + JF2 (26分)	会 話 7	JF3 + JF4 (29分)
会 話 4	JM1 + JF2 (21分)	会 話 8	JM4 + JF4 (28分)

注：1. 参加者は三つの記号で示す。初めの記号のJは日本を表す。次の記号は性別でMは男性を、Fは女性を表す。最後は通し番号である。

2. 会話1~会話4は1997年5月に、会話5~会話8は2002年2月に収集した。

3. 分析単位・対象の認定基準と発話のスピーチレベルの分類

本稿では、収集した会話資料の文字化及び分析の処理にCHILDES（大嶋・MacWhinney編1995）を使い、「発話」を分析の単位とした。発話単位は田丸・吉岡（1994）に倣って、文法、音声（イントネーション、ポーズ）、意味を考慮してひとまとまりとなるか否かで認定した⁵。

発話は、言い終わっている発話、つまり当該発話において情報伝達が終了していると判断される発話、及び言い終わっていない発話の2種類に分けられる。言い終わっていない発話は、相手の割り込みなどにより中断された発話であり、本稿の分析対象ではない。また、応答詞だけの発話（「はい」、「ええ」、「うん」、「いいえ」、「いいや」、「いや」）は言い終わっている発話であるが、そのスピーチレベルの分類基準がまだ一定していないので、分析対象から除外する。

言い終わっている発話は、言い切っている発話、つまり文法的に完結している発話、及び言い切っていない発話、すなわち「中途終了型発話」の二つに分けられる。言い切っている発話は「デス・マス体発話」と「ダ体発話」に分類する。両者は発話末尾にくる下記の表現形式、または終助詞（か／っけ／な／ね／よ／よね等）、終助詞の機能を果たす表現（が／から（ね）／けど（ね）／し（ね）／もの（ね）等）（国立国語研究所1951、許2000）が現れる前の表現形式によって区別される。その違いは以下の通りである。

「デス・マス体発話」：「です／でした／でしょう」、「ます／ました／ましょう／ません／ませんでした」で終わる発話。

「ダ体発話」：「だ／だった／だろう」、「（形容詞）い、（動詞）ル形、及びその過去形（（形容詞）かった／（動詞）タ）と否定形（ない／なかった）」で終わる発話、または「だ／だった／だろう」が付かない名詞と形容動詞、（です／でした／でしょう以外の）助動詞で終わる発話。

「中途終了型発話」は、その発話の意味が場面と文脈から分かるが、言い切っておらず不完全な発話である⁶。スピーチレベルを示す言語表現が発話末に見られず、スピーチレベルの判定ができないので、「デス・マス体発話」でも「ダ体発話」でもないと考える。例えば、「オノマトベって…」で言い終わっている発話の意味が先行文脈から「オノマトベって何ですか」という質問であると特定できるなら、この発話は「中途終了型発話」として認定した。

なお、以下の会話例における使用記号は表3に示しておく。

表3 会話例における使用記号

発話末の記号	。	基本的な発話末記号。
	?	情報を要求する言い終わっている発話を表す。
	+…	言い切っていないが、言い終わっている発話（＝「中途終了型発話」）を表す。
発話の重なり記号	重なった部分は〈 〉で括り、以下の記号で重なった箇所を示す。	
	[D]	次の話者の発話にある〈 〉で括った部分との重なりを表す。
	[<]	前の話者の発話にある〈 〉で括った部分との重なりを表す。
その他	+	一度中断した発話が継続することを示す。発話の最初に表記する。
	[= ! X]	話者の非言語行動を表す。（Xには「笑い」、あるいは吸気の「スー」が入る。）
	[]	相手のあいづちを表す。
	[:]	日本語表記の実際の音声表現を示す。その日本語表記は〈 〉で括る。
	#	ポーズを表す。
	xx	聞き取れない箇所を表す。
	%act :	会話の合間に見られる非言語行動を記述する記号である。
www	プライバシー保護のため、会話の中に現われた人名や団体名などの代わりに使う。	
→	注目されたい発話を示す。	

4. 発話のスピーチレベルの分布

上記の分類に従って本稿の8組の会話資料を調べた結果、発話のスピーチレベルの分布は表4に示す通りになった。

表4から母語話者全員がどの会話においても「デス・マス体発話」を多く使っていることが確認できた（「デス・マス体発話」の使用率は53.5%～85.0%で、平均71.5%）。本稿では、一つの会話においてある話者に最も多く見られたスピーチレベルを当該話者にとっての「会話の基本レベル」（以下、「基本レベル」）とする。従って、母語話者全員にとって「デス・マス体発話」が「基本レベル」となっている。

表4 8組の会話に見られるスピーチレベル別の発話数

		「デス・マス体発話」		「ダ体発話」		「中途終了型発話」		合計
会話1	JM1	275	74.7%	69	18.8%	24	6.5%	368
	JM2	241	75.1%	48	15.0%	32	10.0%	321
会話2	JF1	146	66.7%	39	17.8%	34	15.5%	219
	JM2	188	76.4%	30	12.2%	28	11.4%	246
会話3	JF1	84	53.5%	36	22.9%	37	23.6%	157
	JF2	183	76.6%	20	8.4%	36	15.1%	239
会話4	JM1	151	74.8%	39	19.3%	12	5.9%	202
	JF2	165	73.0%	26	11.5%	35	15.5%	226
会話5	JM3	117	65.0%	21	11.7%	42	23.3%	180
	JM4	148	68.5%	15	6.9%	53	24.5%	216
会話6	JM3	95	73.6%	10	7.8%	24	18.6%	129
	JF3	99	70.2%	29	20.6%	13	9.2%	141
会話7	JF3	84	64.6%	26	20.0%	20	15.4%	130
	JF4	168	59.8%	87	31.0%	26	9.3%	281
会話8	JM4	125	75.3%	11	6.6%	30	18.1%	166
	JF4	209	85.0%	17	6.9%	20	8.1%	246
総数		2478	71.5%	523	15.1%	466	13.4%	3467

注：本稿における比率は、小数第2位を四捨五入して求めた。

上の表4に示した8名の母語話者の「ダ体発話」の使用率を、次の表5のように、話者及び相手の性別に整理し直し、それに基づいて性差の影響を調べた。

表5 性別と「ダ体発話」の使用率

男性話者	同性相手	異性相手	差	平均	女性話者	同性相手	異性相手	差	平均
JM1	18.8%	19.3%	-0.5	19.1%	JF1	22.9%	17.8%	5.1	20.4%
JM2	15.0%	12.2%	2.8	13.6%	JF2	8.4%	11.5%	-3.1	10.0%
JM3	11.7%	7.8%	3.9	9.8%	JF3	20.0%	20.6%	-0.6	20.3%
JM4	6.9%	6.6%	0.3	6.8%	JF4	31.0%	6.9%	24.1	19.0%
平均	13.1%	11.5%	1.9	12.3%	平均	20.6%	14.2%	8.2	17.4%

注：1. 差の欄の「-」は、同性相手より異性相手との会話のほうで「ダ体発話」が多かったことを示す。
2. 差の平均は、相手の性別による違いを見るため、「-」を無視して計算した結果である。

母語話者8名は全員「デス・マス体発話」を「基本レベル」に会話をしているが、表5によれば、「ダ体発話」の使用率は全体的に男性より女性のほうが高い。ただし、男性グループではJM1の「ダ体発話」使用率がほかの3名よりかなり高く、女性グループではJF2の使用率がほかの3名より際立って低いということが確認できた。

一方、相手の性別との関係を合わせて考えると、下記のような差が見られた。8名のうち5名

(男性のJM 2, JM 3, JM 4, 及び女性のJF 1, JF 4) が異性との会話より同性同士の会話のほうで「ダ体発話」を多く使っている。しかし、その差はJM 4 の0.3ポイントからJF 4 の24.1ポイントまでと、大きな開きがある。残りの3名(男性のJM 1, 及び女性のJF 2, JF 3) は上記の5名と違い、異性との会話のほうで「ダ体発話」の使用率が高かった。しかし、JM 1 とJF 3 では0.6ポイント以下の差しか見られないのに対して、JF 2 では3.1ポイントの違いがある。

上述したように、「ダ体発話」の使用と性別についてはある程度の傾向が見られたが、明確な結果は得られなかった。会話参加者が男女4名ずつと少なかったために、性別より個人差が際立つ結果になったと思われる。性差の問題についてはさらに資料を増やして分析する必要がある。

5. シフトした発話の捉え方

表4の通り、「ダ体発話」は計523個用いられているが、そのすべてがシフトした発話ではない。つまり、シフトしたのもあれば、一度シフトしてそのまま続けて使われるものもある。例えば、JM4の車のことが話題となっている次の例1を見てみよう。

例1 (会話5より)

JM 4 : えーと、そのー、カローラフィルダーになってから、それほどでもないですが。

JM 4 : 2年でもまだ2万キロぐらいですね。

JM 3 : あー、は。

→ JM 4 : 2年、1年ぐらいかな。

JM 4 : 1年で2万キロぐらい。

JM 3 : 1年2万キロぐらいってやっぱ普通の人の2倍ぐらいですよ。

JM 4 : あー、かもしれない [=! 笑い]。

JM 3 : [=! 笑い]。

JM 4 : 前のセリカの時によく車乗ってて、あのー、学会が東北大学である、じゃ、
仙台まで車で行こうって言って、車でぶーんって行ったりと [=! 笑い] +…

例1においてJM 4 には「ダ体発話」が計三つある(網掛けをしている発話)。しかし、シフトしたのは最初の「ダ体発話」(→付きの発話)のみであり、他の二つはいずれもシフトしたままの発話である。こうした、シフトしたままとなっている「ダ体発話」は、本稿の会話資料では計73例観察され、「ダ体発話」の14.0% (73/523) を占めている。

なお、本稿における「ダ体」へのシフトとは、同一話者のスピーチレベルに見られる切り替えを指す。直前の相手発話のスピーチレベルは考慮しない。上の例1ではJM 4 の二つ目と三つ目の「ダ体発話」の間にJM 3 の「デス・マス体発話」(――が引いてある発話) が挟まれているが、JM4のスピーチレベルは「ダ体」のまま変化していないので、スピーチレベルがシフトしたとは

認めないことにする。

以下ではシフトしたと判断された450個の「ダ体発話」(523-73=450)のみを対象に、その生起しやすい状況、及びその頻度について分析を行うことにする。

6. 「ダ体発話」へシフトしやすい状況

本稿の会話資料について調べた結果、「ダ体発話」へシフトする傾向が見られる状況は計八つ観察された。それは①相手の発話の一部を繰り返す時、②先取りをする時、③自己発話に対する補足・例示をする時、④情報内容の自己訂正を行う時、⑤何かを思い出しながら話す時、⑥適切な表現を模索する時、⑦相手の発話内容に感嘆を示す時、⑧自分の心情を吐露する時、の八つである。この八つの状況はさらに次のようにまとめられる。①、②は話者が情報を受信したことを、③～⑥は話者が伝達すべき情報を整理していることを示す状況である。また、⑦と⑧は話者が何かについて自分の感情を表出するという状況である。この八つの状況で見られる発話のスピーチレベルの分布は表6に示す通りである。

表6 「ダ体発話」へシフトしやすい状況とスピーチレベル別の発話数

		「ダ体発話」		「デス・マス体発話」		「中途終了型発話」		計
(1) 情報の受信を示す時	①相手の発話の一部を繰り返す時	30	75.0%	7	17.5%	3	7.5%	40
	②先取りをする時	21	61.8%	12	35.3%	1	2.9%	34
(2) 情報の整理を表す時	③自己発話に対する補足・例示をする時	41	51.9%	11	13.9%	27	34.2%	79
	④情報内容の自己訂正を行う時	8	100.0%					8
	⑤何かを思い出しながら話す時	36	83.7%	5	11.6%	2	4.7%	43
(3) 感情の表出を行う時	⑥適切な表現を模索する時	16	88.9%	2	11.1%			18
	⑦相手の発話内容に感嘆を示す時	26	74.3%	9	25.7%			35
	⑧自分の心情を吐露する時	22	95.7%	1	4.3%			23
合計		200	71.4%	47	16.8%	33	11.8%	280

表6に示したように、この八つの状況で「ダ体」へシフトしたと判断される発話は計200個ある。それはシフトした結果の「ダ体発話」の44.4%(200/450)に達している。さらに、八つの状況すべてにおいて、「ダ体発話」の比率が三つの発話のタイプの中で最も高いことも確認できた。特に、④情報内容の自己訂正を行う時では、「ダ体発話」しか見られなかった。しかし、②と⑦では「デス・マス体発話」が、③では「中途終了型発話」が25%から35%ぐらいの割合で出現している。これについては、各状況についての分析で改めて述べる。

なお、表6に関して、話者の性別及び相手の性別が「ダ体発話」の使用に影響しているかどうかを分析した。しかし、八つの状況においてスピーチレベルの選択と性差の間には何も関連性が見出せなかった。分析対象者が男性4名、女性4名と少なかったからかもしれないが、話者または相手の性別が「ダ体発話」へのシフトに影響を与えていると判断する根拠はなかった。ただし、JM1には大きな特徴が見られた。「⑦相手の発話内容に感嘆を示す時」の26例の「ダ体発話」の

うち、約7割の19例(19/26=73.1%)がJM1に集中していることが分かったのである(対JM2に17例, 対JF2に2例)。これ以外には個人的な特徴も見られなかった。

上記のように、①～⑥では情報の受信や整理が行われており、話者の意識が相手に対する配慮よりも情報処理に向けられやすい状況だと考えられる。このことが「ダ体発話」へのシフトを引き起こす一因になっていると思われる。また、⑦と⑧に見られる感情の表出そのものは相手がいなくても可能であり、その時は当然「ダ体」が使われる。つまり、状況⑦と⑧では、相手のいない時と同じ「ダ体」の使用によって、飾り気のない率直な感情であることが伝わると思われる。こうした理由から、これらの状況で現れる発話は「ダ体」になりやすいのであろう。以下、6.1～6.3において、①～⑧のそれぞれについて例を挙げながら説明していく。

6. 1. (1) 情報の受信を示す時

6. 1. 1. ①相手の発話の一部を繰り返す時

我々は会話をする時、相手の発話の一部を繰り返すことがある。本稿の会話資料ではその状況で見られる「ダ体発話」へのシフトは75.0%となっている⁷。例えば、例2のように相手の発話のポイント、例3のように笑いを誘う相手の表現を繰り返しているのが観察される。

例2 (会話5より)

JM3: 家賃聞いていい〈ですか〉[>] [=! 笑い] ?

JM4: 〈あ、いいです〉[<]。

JM4: その1Kの時は、あの一、駐車場も全部込みで4万7千円で[うん、うん、うん]で〈きっち〉[>] +/-。

→ JM3: 〈駐車場込みで〉[<] 4万 〈7千円〉[>]。

JM4: 〈ええ〉[<]。

JM4: キッチン3畳で、部屋が7畳。

JM3: いいところじゃないですか。

例3 (会話3より)

JF1: 生まれも育ちも [あー] 大学も [=! 笑い] +…

JF2: あー、全部名古屋で+…

JF1: ええ。

JF2: あ 〈そうですね〉[>]。

JF1: 〈だから〉[<] 学部の時からずっと名大の教育学部で [あー] そのまんま、その、大学にいて〈まだ〉[>] +/-。

JF2: 〈なに〉[<] +/-。

JF1 : +, いる [= ! 笑い]。

→ JF2 : [= ! 笑いながら] まだいる。

JF2 : 何区でいらっしゃるんですか？

こうした相手の発話の一部を繰り返す例について、中田 (1991) は次のように述べている。

相手のことばをくり返せば、情報を受信したことを伝え、同時に自分の了解が正しいかどうかを確認することができる。こうしたくり返しは、情報伝達を円滑かつ確実にするものである。

(中田1991 : 55, 太字は原文のまま)

この中田の指摘にもあるように、相手の発話を繰り返すという言語行動は情報の受信を示す役割を果たす。その時、話者は情報内容に意識を傾けているので、表現形式に反映する相手との社会的関係に対する配慮が二次的になり、「ダ体発話」へのシフトが起きやすいのではないと思われる。

6. 1. 2. ②先取りをする時

会話においてはある話者の話がまだ終わらないうちに、もう一人の話者がその内容を予測して先にまたは同時に何かを言うこともしばしば見られる。言い換えれば、先取りという言語行動は「相手の言いたいことを理解している」ということを伝え (田中1998 : 35)、情報の受信を示すことになると思われる。本稿の会話資料では61.8%という割合でこの状況での「ダ体発話」へのシフトが観察された。例えば、次の例4と例5がこれにあたる。

例4 (会話8より)

JM4 : [= ! スー] あの一、留学生がたくさんいて [えー] それで彼らが論文をかい、日本語で論文を書いた時に [えー] 直してくれって言って僕のところに持ってくるんですけど [あー, えー]。

JM4 : xx直すと [えー] [= ! スー] 例えば、「何々は」とか「何々が」とかって [えー] 感覚的にはこっちは「何々が」のほうがいいんだよとか言えるんですけど [えー] 「どう違うんですか」って聞かれると、僕は全然わかんなくて+…

%act : 両者笑い。

JM4 : う 〈一ん〉 []。

JF4 : 〈そうです〉 [〈] よね。

JF4 : う 〈一ん〉 []。

- JM 4 : 〈難しいな〉[〈〕とかかと思ひながら[うーん]いつもやってるんですけどね [えー]。
 JM 4 : ふーん。
 JM 4 : でも、論文を書けるレベルってなると、相当高いレベルなんですよ、日本語は。
 JM 4 : [=!スー] いやっ、そうっ [=!笑い] +/.
 → JF 4 : そう 〈でもない〉 [〈〕 [=!笑い]。
 JM 4 : 〈人によっては〉 [〈〕 xx まちまち 〈ですね〉 [〈〕。

例 5 (会話 2 より)

- JF 1 : 交通費とかでお金が稼げませんでした [=!笑い] ?
 JM 2 : あ、交通費はくれないんですよ+/.
 JF 1 : 〈あっ〉 [〈〕 +/.
 JM 2 : +, 〈近〉 [〈〕 すぎて。
 JM 2 : あの一、東京なら [あー] 東京、地下鉄170円とか、そんななんで+…
 JF 1 : そうっ、大学も東京だからそうですね。
 JM 2 : ええ。
 JF 1 : 私の友人たちは、例えば、東京の会社を三つ四つ内定とかもらいますよね。
 JF 1 : で、行く時に全部の会社から交通費をもらうので+…
 JM 2 : あ、そこまでサギのようなことしてたんですね。
 JF 1 : で、友達 xx 何かに泊まれば、もう 〈丸儲け〉 [〈〕 +/.
 → JM 2 : 〈丸儲け〉 [〈〕。
 JF 1 : +, っていう感じで [=!笑い] +…
 JM 2 : うん、そこまでやらなかったですね。

こうした先取りの発話は前節の「相手の発話の一部を繰り返す時」と同様に、情報内容のほうに意識が傾いているため、「ダ体発話」へシフトしやすいのではないかと考えられる。しかし、本稿の会話資料では先取りは35.3%という割合で「デス・マス体発話」で現れている⁸。先取りは一種の割り込みで、あまり行儀のいい言語行動ではない(野田1996)が、一方では積極的な会話への参加を示す働きもある(田中1998)。先取りにはこのように相反する面があるため、ある程度スピーチレベルのことを気にかけながら話をしている結果、「デス・マス体発話」も比較的多くなっているであろう。

上の例 2～例 5 を見て分かるように、会話をする者同士は繰り返しや先取りによって、相手に今聞いている情報を受け取ったことを示すことがある。その時には意識が情報内容のほうに集中しがちで、そのため「ダ体発話」へとシフトする機会が多いのであろう。

6. 2. (2)情報の整理を表す時

③自己発話に対する補足・例示をする時、④情報内容の自己訂正を行う時、⑤何かを思い出しながら話す時、⑥適切な表現を模索する時の四つの状況は、すべて情報の的確な伝達を目指して、意識を情報の整理に向けている時であると考えられる。

6. 2. 1. ③自己発話に対する補足・例示をする時

話者がある情報を伝えた後、何らかの原因でそれでは不十分だと感じた時に、補足・例示を行って説明することがある。本稿の会話資料ではこの状況で生じた「ダ体発話」へのシフトは51.9%となっている。

例えば、次の例6では、JF1が「今から民間企業に入ったら仕事があまくいかないだろう」ということについて話している。JF1がそれについて補足・例示（基本的な作法を知らない、定時出勤・退社が苦手）を行う発話はいずれも「ダ体」になっている。

例6（会話2より）

JF1：絶対私、企業なんかで働いたら、やっていけないでしょうね。

JM2：そうですか。

→ JF1：基本的な作法みたいなもの〈知らないし〉[]。

JM2：〈それはだって教えて〉[] くれますからね。

JF1：〈そうですか〉[]。

JM2：〈だって〉[] 22で入ると、もっとひどいですから。

JF1：そうなんですか。

JM2：最初はひどい人はひどいですから。

JF1：はー。

JM2：僕もよく怒られましたしね [=！笑い]。

JF1： [=！笑い]。

→ JF1：なんか、一番、私ができないと思うのは、定時出勤、定時退社 [=！笑い]。

JM2：あ、それが一番学部の学生に難しいです [=！笑い]。

こうした場合、様々の情報の中から選択的に提示することになり、情報の整理に意識が集中してしまうので、シフトが起きやすいのではないと思われる。

しかし、自己発話に対する補足・例示をする時は、本稿の会話資料では34.2%が「中途終了型発話」となっている。この場合、その前に出した情報に対して、何か付け加える、または例を挙げることでさらに詳しい説明が行われる。その時は重複を省き、肝心なところを言えばよいわけで、「ダ体発話」ほどではないが、「中途終了型発話」も使われるのであろう。

6. 2. 2. ④情報内容の自己訂正を行う時

話者が自分の出した、あるいは出そうとする情報が正確でないと感じた時、その情報内容が間違っていることをことばで示すことがある。このような状況では話者は間違いに気付いたことを思わず口に出してしまうので、相手に配慮した「デス・マス体」を使う余裕がなく、「ダ体」になりやすいのではないと思われる。例えば、会話が始まってまもない時に見られた自己紹介の次の例7がこれにあたる。

例7（会話5より）

JM4：あの一 www 学部のJM4と言います。

JM3：JM4さん〈ですか〉〔〕？

JM4：〈はい〉〔〕。

JM3：え、今大学院〈ですか〉〔〕？

→ JM4：〈えーと〉〔〕 大学院は、いつから、去年、えっ、違う。

JM4：〔=!スー] えーと #www 年の3月に卒業して [はい、はい] #えー、www 年の4月から1年間 www をやったんですよ 〈www学部で〉〔〕。

例7では、JM3の質問「今大学院ですか？」に答えているJM4が、自分の言ったことが間違いであると気づき、自己訂正を行っている発話が「ダ体発話」へシフトしている。JM4の言ったことが間違っていると判断できるのは以下の3点による。まず、→付きの発話の最後の「違う」は声が弱くなってきている。次に、「違う」の前に「えっ」(.....が引いてある箇所)という気づきのしるしがある。最後に、その後の発話内容から間違っていると確認できる。

表6に示したように、本稿の会話資料では、こうした情報内容の自己訂正をしている発話は100%という割合で「ダ体」で行われている。

6. 2. 3. ⑤何かを思い出しながら話す時

話者が何かを言う際、その情報について思い出しながら話すことがある。この時は、言語表現のスピーチレベルより、情報内容のほうにより意識を集中してしまうため、「ダ体」になってしまうのではないと思われる。この状況での「ダ体発話」へのシフトは、本稿の会話資料では83.7%という割合で現れている。例えば、心理学に興味を持っている(JF2の)友人のことが話題になっている次の例8が該当する。

例8（会話3より）

JF2：なん、こう、心理学というものに [うん] こう憧れみたいなのがあって [うん] こういう、なんか、人を助けたいみたいな [うーん] [=!笑い] そういうイメー

ジだけで物言ってるような、まだそんな段階だと思うんで [うん] そんなに、うん、まだわかんないんですね、きっと。

JF1 : 4年生なんですか？

→ JF2 : えーっと、あの子も編入したので、そうですね、今年、4年生なのかな。

JF2 : 3年生の時点で、そのこと言ってたんで [はー] まだ分かってなかったんだと思います [うん]。

例8では、JF2は自分の友人が、相手のJF1の専門である心理学に興味を持っており、いつか名大の大学院を受けたがっているがまだ何も分かっていないようだという。その発話の後、JF1の「4年生なんですか？」という質問に、JF2が思い出しながら答えている発話が「ダ体発話」へシフトしている。その発話が「思い出しながら」と判断できるのは、JF2の発話の最初に「えーっと」、そして途中に「そうですね」(.....が引いてある箇所)という何かを思い出そうとする時などに使われる表現が見られるからである。

6.2.4. ⑥適切な表現を模索する時

ある情報を伝えるにあたって適切な表現が見つからず、何かを「～というか」のように自問する形で言う時がある。本稿の会話資料ではこの状況で見られる「ダ体発話」へのシフトは88.9%となっている。心理学が女の子に与えるイメージの話がされている例9を見てみよう。

例9 (会話4より)

JF2 : で、そこに行ってる友達が、あの一、その、臨床心理学をやりたいというんで [えー] 今度やっぱり大学院、名大受けるって言ってますけど [あー]。

→ JF2 : 女の子って、こうなんていうの、心理学っていう響き、すごく憧れるっていうかね。

JM1 : あー、あ、そういうのがあるんでしょうね。

JF2 : ロマン、ロマンチックって変ですけど [はい、はい、はい]。

JF2 : なんか、すごく、こう、神秘的で [はー] だから、はやりと言えばはやりですよ
ね。

例9において、JF2は心理学に対して女の子が抱いているイメージについて話そうとしているが、なかなかよい表現が見つからないようで「心理学っていう響き、すごく憧れるっていうかね」と「ダ体発話」へシフトしている。当該発話がこの⑥適切な表現を模索する時にあたると判断したのは、「～というか」という表現形式になっているほかに、その発話の途中には「こうなんていうの」という迷っているような発話(.....が引いてある箇所)があり、JF2がその後いろいろ表現を工夫して話をしているからである。

上記の例6～例9に見られるように、我々が会話をする時、情報内容のほうにより意識が集中することがある。つまり、相手に情報を的確に伝えようとするほうに気を取られ、言語表現のスピーチレベルの制御が相対的に疎かになってしまうこともあるだろう。その場合には「ダ体発話」へのシフトが起こりやすくなると言ってよいだろう。

6.3. (3) 感情の表出を行う時

この(3)感情の表出を行う時として、本稿の会話資料で観察されたのは⑦相手の発話内容に感嘆を示す時、⑧自分の心情を吐露する時の二つである。

6.3.1. ⑦相手の発話内容に感嘆を示す時

相手の言っていることに感嘆を表す例では、次の例10のように具体的な内容（「経済はやっぱり違うなー。」「経済力あるなー。」）を言う以外に、例11のような「素晴らしい。」、または「すごい(な)。」などのような表現も多く観察された。

例10 (会話1より)

JM2：社会人はなんかくれるんですよ、1台。

JM2：あ、支給されるんですよ、取りあえず。

JM1：えっ、そうなんですか。

JM2：研究しっ、部屋、ゼミ室、あの一、学生の部屋に1台ありますけど [はい]。

JM2：それから一人ずつノート今預けられてますけど。

→ JM1：経済はやっぱり違うなー [=! 笑い]。

JM1：経済力あるなー。

JM1：そうなんですか。

例11 (会話4より)

JF2：ど、どういった専門でしたっけ？

JM1：えっと、私、認知科学って言って、えっとね、うーん、イメージ的には、心理学が一番近いんですけどね。

JF2：心理学ですか。

JM1：心理学と、うーん、コンピュータの [うーん] と足して2で割ったような〈xx 学問〉 [] +/-

JF2：〈理系ですね〉 []。

JM1：えーとね、いや、うん、文系と理系の狭間みたいなもんですね。

JF 2 : 素晴らしいですね。

JM 1 : 〈いえ, 全然〉 [] + …

JF 2 : 〈両方ですか〉 [<] [= ! 笑い] ?

JM 1 : 両方, いや, 両方じゃなくて [= ! 笑い] 両方じゃなくて [うん] えー, 両方と
もできないから 〈中間をやってるんですよ〉 [] [= ! 笑い]。

→ JF 2 : 〈いや, いや, 素晴らしい〉 [<]。

JF 2 : でも, それってあれですか, 臨床心理学とか+ …

JM 1 : とは, また違いますね, かなり。

この⑦相手の発話内容に感嘆を示す時には, 本稿の会話資料においては74.3%の割合で「ダ体発話」へのシフトが観察された。残りの25.7%が「デス・マス体」で現れており, その比率は「②先取りをする時」の35.3%に次いで高い。それは, この状況の発話は相手の発話内容に対する感情的反応であり, 評価も含むので, たとえ「ダ体発話」のほうが自分の感情を率直に表すことができるとしても, スピーチレベルのことを比較的注意しながら話しているからであろう。

6. 3. 2. ⑧自分の心情を吐露する時

話者が自分の感情や気持ちなどの心情を表す時がある。この場合, 声が少々小さくなるという音声上の特徴が見られた。本稿の会話資料では, この状況で見られた「ダ体発話」へのシフトは95.7%という高い割合に達している。例えば, 今後の進路などが話題になっている次の例12がこれにあたる。

例12 (会話2より)

JM 2 : えー, 今残ってらっしゃるってことは [えー] ま xx に進もうと+ …

JF 1 : うん, そのつもりですけど。

→ JF 1 : いつ進めるのか [= ! 笑いながら] 分からない⁹。

JF 1 : ずっと非常勤講師のまま行かなきゃいけないかもしれない。

JM 2 : はー。

JF 1 : うーん。

→ JM 2 : よかった, 行かなくて。

JM 2 : ま, 行く気なんか, さらさらなかったですけどね。

例12で, JF 1 は自分のような心理学専門の者はなかなか専任の職が見つからなくて, もしかしたらずっと非常勤講師しかできないということに対する自分の気持ちについて話している。それを聞いたJM 2 は, 当初大学に入る時, 心理学を専攻しなかったことについて「よかった, 行か

くて。」と自分の気持ちを表している。このJF1とJM2の自分の心情を吐露する発話はいずれも「ダ体発話」へシフトしている。

例10～例12に見られるように、相手の発話内容に感嘆を示したり、自分の心情を吐露するような発話では「ダ体発話」にシフトする傾向のあることがはっきりと確認できた。感嘆や心情を表明する時には、「デス・マス体」の持つよそよそしさよりも「ダ体」の持つ率直さが優先されるといふことなのであろう。

7. 考察

7.1. 話者の意識と「ダ体発話」へのシフトの機能

前章では「ダ体発話」にシフトしやすい八つの状況について報告した。本節では話者の意識と「ダ体発話」へのシフトの機能について考察する。

本稿では、2章で述べたようにフォローアップ・インタビューを実施し、母語話者本人にスピーチレベル・シフトの意図や理由の説明を求めるとともに、相手のスピーチレベル・シフトについてもコメントを求めた。その結果から次の2点が明らかになった。

第1に、自分のスピーチレベル・シフトについてすべて明確な説明をした者は1名もいなかった。相手の発話については、会話4におけるJM1以外は、全員が相手の発話で気になることはなかったと述べている¹⁰。このことは、スピーチレベル・シフトが多くの場合無意識に行われており（三牧1993、足立1995、宇佐美1995）、相手に違和感を与えるようなシフトは極めて少ないということを示している。

第2に、状況④⑤⑥における自分の「ダ体発話」は自問するようなものであるので、同年代の初対面相手には使っても失礼にならないばかりか、もっと楽に話をしていこうということの間接的に示すことができる。そして、これらの状況における相手の「ダ体発話」は、自分に向けられたものではないと判断して聞き流したとの報告がある。また、⑦や⑧の発話は「ダ体」で行うと会話が盛り上がるが、もし「デス・マス体」になってしまうと、堅苦しさが残るばかりでなく、せつかくリラックスした会話の雰囲気白けてしまうのではないかとの意見もあった。このような報告は、「ダ体発話」の出現によって最初の緊張感やよそよそしさから少しでも解放され、会話の雰囲気がリラックスし、話しやすくなっていく（三牧2000）と思われることを示している。これは、「ダ体発話」へのシフトには相手に親しみを表す機能があるという従来からの指摘（表1参照）を裏付けるものでもある。

フォローアップ・インタビューの結果から、母語話者は「ダ体発話」へのシフトを多くの場合無意識に行い、そのことで互いに違和感を感じてはいないということ、シフトが親しみの表示、話しやすい雰囲気の醸成であると受けとめていること、の2点が確認できた。

さらに、初対面の母語話者は多くの場合無意識にシフトを行っているが、決して無秩序に「ダ

体発話」にシフトしているわけではないことも明らかになった。母語話者は初対面であることから「デス・マス体発話」が基本になることは分かっているが、同時に初対面のよそよそしい会話の中に親しみやりラックスムードをどのように作り出せばよいかも承知しているのである。つまり、上記の状況①～⑧では「ダ体発話」にシフトしても失礼にならないことを承知しており、この状況の特性を利用して「ダ体発話」へシフトしているのだと考えられる。

むろん、本稿の会話資料から抽出された八つの状況に見られる「ダ体発話」へのシフトは、会話参加者が同年代であることと無関係ではない。例えば、宇佐美（1995）は初対面の目上の相手に対してはあまり「ダ体発話」へのシフトが起きないと述べている。また、三牧（2000）では初対面で同性の大学生や大学院生を対象に、「独話的発話」「心情の直接表出」などについて調べているが、この二つの場合では上位者は下位者より「ダ体発話」を多く使っているという結果が得られている。これらの指摘から、相手が目上である場合だと、本稿の会話資料で見られた八つの状況でも「ダ体発話」へシフトしにくいと考えてよいであろう。つまり、相手が目上でスピーチレベルにより配慮しなければならないと考えたならば、「ダ体発話」へのシフトはより意識化されたと考えられる。これに関しては今後さらに調査する必要がある。

7.2. 先行研究の結果との関わり

上記のように、本稿の会話資料から「ダ体発話」へシフトしやすい状況が八つ抽出された。この八つの中で、情報の受信とした①と②はこれまでの研究では指摘されておらず、本稿で新たに追加したものである。

これまでの研究では、表1に示した通り、独り言的な発話あるいは自問するような発話は「ダ体」にシフトすることがあると指摘されてきた。独り言的な「ダ体発話」は本稿の会話資料にも出現している。例7～例12の「ダ体発話」がこれに相当する。これらの発話は状況④⑤⑥⑦⑧で使われていたが、状況④⑤⑥で発せられる場合は情報処理の面が強く、状況⑦⑧では感情表出の面が強いと考えられる。従来は「独り言的」として一つに括られていた「ダ体発話」は、産出の背景を考えると、二つに分けられることが明らかになった。

「ダ体発話」へのシフトには親しみの表示、つまり「心的距離の短縮」、あるいは話しやすい雰囲気醸成する機能があると言われてきたが、本稿でもフォローアップ・インタビューの結果からこのことが裏付けられた。しかし、「談話展開標識」の機能を果たしていると考えられる「ダ体発話」へのシフトは確認できず、スピーチレベル・シフトと談話展開に対応関係は見られなかったという大浜他（1998）の報告と同様の結果であった。

先行研究では「機能」と「条件」という二つの用語の区別が必ずしも明瞭ではないということを一.1.1において指摘した。本稿では「ダ体発話」へのシフトが生起しやすい八つの「状況」を会話資料から抽出し、その「機能」が先行研究で言われてきたように「心的距離の短縮」にあることを確認した。これによって用語に関する問題点は解消されたと考える。

8. まとめと今後の課題

本稿では、同年代の初対面日本語母語話者同士の会話を資料に、「ダ体発話」へのシフトについてその生起しやすい状況、及び生起する頻度の2点を課題に分析した。その結果は次の3点にまとめられる。

- I. 「ダ体発話」へのシフトは八つの状況で起きやすいことが明らかになった。さらに、その八つの状況は、(1) 情報の受信を示す時、(2) 情報の整理を表す時、(3) 感情の表出を行う時、の三つに分類することができる。
- II. その八つの状況で現れた「ダ体発話」、「デス・マス体発話」、「中途終了型発話」の数を調べた結果、「ダ体発話」へシフトする頻度は八つの状況において一様ではないことも分かった。
- III. フォローアップ・インタビューの結果から、母語話者は多くの場合無意識に「ダ体発話」へのシフトを行い、そのことで互いに違和感を感じてはいないということ、シフトが親しみの表示、話しやすい雰囲気醸成であると受けとめていること、の2点が確認できた。母語話者は、本稿の会話資料から抽出した八つの「ダ体発話」へシフトしやすい状況の特性をうまく利用して「ダ体発話」へシフトしていると考えられる。

この八つの状況における「ダ体発話」へのシフトは、本稿の会話資料における母語話者が同年代の若者であるという事実と無関係ではないと思われる。つまり、相手の年齢や地位などによってスピーチレベル・シフトに対する話者の意識化の度合いが異なり、スピーチレベル・シフトが生起する状況、及びその頻度が変動すると考えられる。従って、年齢や上下関係などに差がある話者たちの会話、さらに日本語学習者の会話では、おそらく上記の結果とは異なる様相が見られるだろう。今後そのような会話の分析を行い、本稿の仮説を検証していきたい。

注

- 1 「スピーチレベル・シフト」はほかに「敬語(の)レベルシフト」(生田・井出1983)、「待遇レベルシフト」(三牧1993・2000)などとも呼ばれている。しかし、スピーチレベル・シフトという用語がより広く使われているので、本稿でも「スピーチレベル・シフト」という用語を使うことにする。
- 2 宇佐美(1995:35)における中途終了型発話とは、「述部が省略される場合や、複文の場合、従属節のみで主節が省略されたりする発話、すなわち、最後まで言い切っていない発話」である。本稿の捉え方はそれと少々異なる。詳しくは3章を参照されたい。
- 3 本稿では「状況」ということばを日常的な意味で用いる。「状況」とは、ある特定の場(時と場所)で起きていること、及びそれを取り囲む事物のすべてを指す。本稿では、場面、文脈、話者の心理状態などを「状況」に含めて考えることにする。
- 4 フォローアップ・インタビューは、各参加者の会話がすべて終了した後、相手がいなくても各参加者の言語使用意識の確認も兼ねて、以下の手順で行った。
 - a. 「ダ体」(普通体)と「デス・マス体」(丁寧体)についての認識、使用意識を確認する。

- b. 録音する前、参加者たちに初対面の相手との会話である旨を伝えておいた。そこで、各参加者がどんな心構えで会話に臨んだかを聞く。
- c. 会話をしている時の、相手の話し方や言葉遣いに対する感想を求める。
- d. 参加者が意識的にスピーチレベル・シフトを行っていたかどうかを確認する。
- e. 参加者と一緒に会話資料を聞きながら、自分あるいは相手のスピーチレベル・シフトのあった箇所についてその意図・理由をできる限り説明してもらう。

ただし、e.については、参加者の都合など時間の関係で、録音した会話資料のうち、開始直後の5分間、開始後10分から3分間、及び終わりの2分間、計約10分間のテープを聞いて、いろいろとコメントを求めた。

5 発話単位の認定の詳細は土岐哲他 (1998 : 185 「3 文字化マニュアル」)、及び陳 (2000) を参照されたい。

6 「中途終了型発話」は具体的に (A) 複文の主節が省略されている発話 (例A), (B) 述部が省略されている発話 (例B), (C) 形式は「ダ体発話」に見えるが、音声的には「ダ体」と認められない発話 (例C) の3種類に分けられる (陳2000)。

例A (会話5より)

JM4 : だから、別に実家にたっ、いながら、この、名大に通うこともできるんですけど [えー、えー]。

→ JM4 : [=! スー] 一人暮らし、今までしたことないしなあと思って+…

JM3 : はい、はい〈はい、はい〉 []。

JM4 : 〈えー〉 [〈]。

→ JM4 : 一度ぐらいしてみたいと思って [=! 笑い] +…

例B (会話2より)

JF1 : 女性で、独身の人で、27, 8で転職した子って多いんですよ。

JM2 : あ、そうなんですか。

(中略)

JM2 : なんかないですか、その辺には〈心理学的に〉 [] [=! 笑い] ?

→ JF1 : 〈私も、だから〉 [〈] おもしろいなと思って [=! 笑いながら] ついついネタにしようかなと+…

JF1 : こういう発想がたぶん大学院生なんだろうね。

例C (会話3より)

→ JF2 : そうすると、その目指してらっしゃる就職というのは〈病院〉 [: びょういーん] +…

JF1 : いえ、一応、大学なんですけど [うん]。

例Cのような発話は、末尾が平板のイントネーションを伴い、伸ばしてゆっくり話されている。このような音声的特徴から、この発話は言い切っていないものと認定した。なお、多くの場合、相手に質問する時に見られる。

7 相手の発話の一部を繰り返す時の「デス・マス体発話」7例は、いずれも発話の末尾が下降音調となっている「ですか」で終わっている。

8 先取りをする時、「デス・マス体」となっている12例では、1例を除き、ほかはすべて終助詞の「(質問の) か／ね／よね」のどれかが末尾に付いている。

9 例12におけるJF1の「いつ進めるのか分からない。」、及び例3のJF1の「(前略) 大学にいて、

まだいる。」という発話は、いずれも話者が自分のことを笑うかのように、冗談めかして言っているものとも考えられる。冗談めかした発話をする時に「ダ体発話」へのシフトが起きるということは、宇佐美（1995）でも指摘されている。「ダ体」にすることによって他の部分と違うということが伝わり、明かに冗談であることを示す効果があると思われる。

こうした冗談めかした発話は、例3と例12に見られたものを除くと、本稿の会話資料では僅か6例しか観察されなかった。数は少ないが、「ダ体発話」3例（50.0%）、「デス・マス体発話」1例（16.7%）、「中途終了型発話」2例（33.3%）という結果から、「ダ体発話」で現れる傾向があると言ってよいであろう。しかしながら、冗談めかした発話は、用例が少ない、及び本稿の会話資料から抽出された八つの状況と性質が異なり、(1) (2) (3) の3分類のどれにも入らないという理由で、一緒に扱わないことにした。

なお、例12におけるJF1の「いつ進めるのか分からない。」という発話は、自分の心情を吐露するものであると同時に、冗談めかした発話でもある。この例12から「ダ体発話」へのシフトはいくつかの状況が重なって起こることもあるということが分かる。

10 会話4はJM1とJF2の会話である。「理由はうまく言えないが、何だかJF2に目下扱いをされているような感じがした」とJM1は述べている。

引用文献

- 足立さゆり（1995）「日本語の会話におけるスピーチ・レベル・シフト」『拓殖大学日本語紀要』5, 73-87, 拓殖大学留学生別科
- 生田少子・井出祥子（1983）「社会言語学における談話研究」『言語』12-12, 77-84, 大修館書店
- 井出祥子（1993）「対人関係修辭とボライトネス—社会語用論の立場から—」『英語青年』139-5, 23-26, 研究社
- 上仲淳（1997）「中上級日本語学習者の選択するスピーチレベルおよびスピーチレベルシフト—日本語母語話者との比較考察—」『日本語教育論文集—小出詞子先生退職記念—, 149-165, 凡人社
- 宇佐美まゆみ（1995）「談話レベルから見た敬語使用—スピーチレベルシフト生起の条件と機能—」『学苑』662, 27-42, 昭和女子大学近代文学研究所
- 大嶋百合子・Brian MacWhinney編（1995）『日本語のためのCHILDESマニュアル』McGill University
- 大浜るい子・鈴木雅恵・多田美有紀（1998）「自由談話に見られるスピーチレベルシフト現象」『教育学部研究紀要』44-2, 389-397, 中国四国教育学会
- 岡本能里子（1997）「教室談話における文体シフトの指標的機能—丁寧体と普通体の使い分け—」『日本語学』16-3, 39-51, 明治書院
- 国立国語研究所（1951）『現代語の助詞・助動詞—用例と実例—』秀英出版
- 杉山ますよ（2000）「学生の討論におけるスピーチレベルシフト—丁寧体と普通体の現れ方—」『別科論集』2, 81-102, 大東文化大学別科日本語研修課程
- 鈴木雅恵（1999）「日本語母語話者のスピーチレベルシフトについて—親疎関係を中心に—」『平成11年度日本語教育学会秋季大会予稿集』, 57-62, 日本語教育学会
- 田中妙子（1998）「会話における〈先取り〉について」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』10, 17-40, 早稲田大学日本語研究教育センター
- 田丸淑子・吉岡薫（1994）「日本語発話資料分析の単位をめぐる問題—第二言語習得過程観察の立

- 場から—」 *The language programs of the International University of Japan : Working papers* 5, 84-100, Language Programs, the International University of Japan
- 陳文敏 (1998) 「台湾人日本語学習者と日本語母語話者の発話末に見られるスピーチレベルシフト」『平成10年度日本語教育学会春季大会予稿集』, 57-62, 日本語教育学会
- _____ (2000) 「日本語母語話者の会話に見られる「中途終了型」発話—表現形式及びその生起の理由—」『言葉と文化』創刊号, 125-141, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻
- 土岐哲他 (1998) 『就労を目的として滞在する外国人の日本語習得過程と習得にかかわる要因の多角的研究』平成6年度～平成8年度科学研究費補助金(基盤研究(A))研究成果報告書(課題番号:06301099)
- 中田智子 (1991) 「会話にあらわれるくり返しの発話」『日本語学』10-10, 52-62, 明治書院
- 野田尚史 (1996) 「日本語の会話における「わりこみ」」『言語探求の領域:小泉保博士古稀記念論文集』, 373-382, 大学書林
- 許夏玲 (2000) 『話し言葉の文末におけるモダリティの表現形式—「接続助詞」「条件形」「第二中止形」「引用助詞」—』名古屋大学大学院博士学位論文
- 三牧陽子 (1993) 「談話の展開標識としての待遇レベル・シフト」『大阪教育大学紀要 第I部門』42-1, 39-51, 大阪教育大学
- _____ (2000) 「丁寧体基調の談話にみる独話的発話・直接引用・心情の直接表出—「働きかけ方式」のポライトネス・ストラテジーとして—」『大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流』4, 37-53, 大阪大学留学生センター
- Ikuta, Shoko (1983) *Speech Level Shift and Conversational Strategy in Japanese Discourse. Language Sciences* 5-1. 37-53.

(投稿受理日:2003年2月4日)

(改稿受理日:2003年7月24日)

陳 文敏 (ちん ぶんびん)

名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻博士課程後期課程

wenmiin@fii.freemove.ne.jp, wenmiin758@hotmail.com

The shift to plain-style in the Japanese conversations by the same generation strangers: Focusing on the situations where it tends to occur and its occurring ratio

CHEN Wen-Miin

Graduate student, Nagoya University

Keywords

shift to plain-style, reception of information, arrangement and organization of information, expressing emotion, subconsciously

Abstract

The Japanese language has basically two speech styles, namely “polite” and “plain”. In Japanese conversations, it is often observed that speech styles shift from polite to plain and vice versa as seen by a speaker’s utterances. A considerable amount of research has been conducted on style shift in Japanese. Many of the previous studies claim that style shift has two functions: (a) to control the psychological distance with interlocutor and (b) to act as a boundary marker of discourse. However, no speculation has taken place concerning the kind of situations where the shift to plain-style tends to occur and its occurring ratio.

This study, based on eight conversations lasting approximately 200 minutes between Japanese native speakers from the same generation in their initial encounter, examines the situations where the shift to plain-style occurs. The eight conversations are essentially in polite style, but 450 of the total 3,467 utterances shift to plain style. Analysis of the contexts where these 450 plain-style utterances occur indicates that there are at least eight situations where the shift to plain-style tends to occur. The eight situations can be classified into three types relating to: (1) reception of information, (2) arrangement and organization of information, and (3) expressing emotion. It is also indicated that the shift to plain-style seen in native Japanese speakers is performed subconsciously, but native Japanese speakers are aware that these eight situations present an opportunity whereby they can shift to the plain style in order to show intimacy towards the interlocutor and create a relaxed atmosphere.